O2-040

血友病の子どもの母親が出血の予防と対処をしながら子どもを育てていくプロセス —発症から幼児期までに焦点を当てて—

古尾谷 侑奈[1]、来生 奈巳子[2]、遠藤 数江[2]

[1]研究開発法人国立成育医療研究センター　看護部、
[2]国立看護大学校

【目的】
血友病の子どもの母親は、出血や治療に関する悩みや葛藤を抱きながら子どもを育てている。本研究は、血友病の子どもの母親への支援を検討するために、母親が発症から幼児期までの間にどのように出血の予防と対処をしながら子どもを育ててきたのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。

【方法】
血友病の子どもの母親10名を対象に半構造化面接法によりデータ収集を行い、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを参考に分析を行った。本研究は、所属していた施設の倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】
以下の13カテゴリーが生成された。血友病の子どもの母親は、発症時は【出血の原因がわからない】まま困惑し、診断時は【病気を受け止めきれない】でいた。生命や予後を脅かす【目に見えない出血はこわい】と捉え、初めは【子どもをどう守っていけばよいのかわからない】ため、【目に見えない出血からあらゆる手段で子どもを守る】ようになっていた。母親は、【注射をしなければならない現状と子どもへの影響に苦悩する】一方、注射の効果を実感し【出血の予防と対処には注射があるから大丈夫と思える】ことで、【目に見えない出血から注射で子どもを守る】ようになっていた。【子どもの成長を実感する】ことで、【目に見えない出血からあらゆる手段で子どもを守る】方法を徐々に緩めていた。【周囲の人からの偏見や誤解に傷つき悩む】経験をしながらも、保育士らには病気の説明を行い【子どもの生活の場を拡大し維持する】ことで、子どもを育てていた。出血から子どもを守る過程で、母親は【子どもの将来を見据えて育てる】ことをしていた。同時に、【子どもの将来を見据えて育てる】ために、出血から子どもを守る手段を拡げながら子どもを育てていた。以上の過程で、母親は、【患者会の母親達に支えられる】という支援を得ながら子どもを育てていた。

【考察】
結果より、看護師は、子どもの成長に合わせた具体的な出血の予防と対処の方法を伝えること、他の医療機関との連携や保育所等への情報提供を行うこと、母親が注射の手技を獲得する過程でプレッシャーを抱える可能性や周囲の人の偏見や誤解に傷つき悩んでいる可能性があることを踏まえて関わることの必要性が示唆された。また、血友病の子どもと家族に携わる医療者は、社会において血友病が正しく理解されるよう働きかけていく必要があると考えられた。

O2-041

子どもの行動理解に基づくチャイルドシート使用促進アニメーションの地域介入効果

出口 貴美子[1,2]、大野 美喜子[3,5]、西田 佳史[3,5]、北村 光司[3,5]、山中 龍宏[3,4,5]

[1]出口小児科医院、
[2]NPO法人Love & Safetyおおむら、
[3]産業技術総合研究所、
[4]緑園こどもクリニック、
[5]NPO法人Safe Kids Japan

【目的】
2015年のチャイルドシートの使用率は62.7%であり，未だ，多くの子どもの命が危険にさらされている。これまでに，本研究チームが実施したオンライン調査の結果から，約70%の保護者は「子どもがチャイルドシートを嫌がる」経験をしていること，約25%の保護者は，子どもが嫌がった時「子どもをチャイルドシートから降ろす」という行動をとっていることなどを明らかにした。この結果に基づき，子どもがチャイルドシートに着座するのを嫌がり，チャイルドシートをしないまま事故にあった場合を再現したアニメーションを作成した。本研究では，作成したアニメーションを活用したワークショップを開催し，チャイルドシート使用に対する教育効果を検証した。

【方法】
長崎県大村市で活動するNPO法人Love & Safetyおおむらと連携し，3つの保育園でワークショップを実施した。ワークショップの前後に，各保育園でチャイルドシートの使用状況を目視で確認し，アニメーションを活用したワークショップの教育効果を検証した。ワークショップ前の調査は，2015年2月3日から2月5日，ワークショップ後の調査は，2015年6月2日から4日に行った。

【結果】
ワークショップ前の調査では，合計198台の車の256シートを調査した。その結果，「子どもをチャイルドシートに乗せて，チャイルドシートのベルトを装着している（正しく使用）」人が145人（57%），「チャイルドシートを取り付けていない（チャイルドシートなし）」人が97名（38%），「チャイルドシートは取り付けているがチャイルドシートに乗せていない（チャイルドシートに乗せていない）」人が10名（4%），「子どもをチャイルドシートに乗せているがベルトを装着していない（ベルトなし）」人が4名（1%）であった。ワークショップ後の調査では，224台の車の287シートを調査した。その結果，「正しく使用」している人が177人（62%），「チャイルドシートなし」の人が76名（27%），「チャイルドシートに乗せていない」人が27名（9%），「ベルトなし」の人が7名（2%）であった。

【考察】
ワークショップにより，チャイルドシートの使用率は約5ポイント上昇，チャイルドシートは取り付けているが乗せていない人は約11%の減少を認め，アニメーションを活用したワークショップの効果を確認した。今後，Safe Kids Japanや小児保健に関連する学会などと連携し，アニメーションを全国に普及させる予定である。

Presented by Medical*Online